

令和四年度

日本近世文学会秋季大会

- ・大会プログラム
- ・シンポジウム要旨

期日 十一月五日（土）・六日（日）
会場 同志社大学／オンライン会場

日本近世文学会秋季大会のご案内

会員の皆様には時下ますますご清祥のことと存じます。
さて、二〇二二年度秋季大会を左記の通り開催いたしますので、ご案内申し上げます。

二〇二二年九月二十八日

大会プログラム

【会場】同志社大学／オンライン会場

【行事】

第一日 十一月五日（土）

委員会（二・二〇〇～一三・四〇）

会場開室（一三・三〇〇）

開会時間（一四・〇〇〇）

シンポジウム（一四・二〇〇～一七・二〇〇）

「越境する・交流する——近世演劇を起点として——」

日本近世文学会秋季大会実行組織代表 山田和人
日本近世文学会事務局代表 池澤一郎

〔日本近世文学会事務局〕

早稲田大学文学学術院 池澤一郎研究室
〒162-8644 東京都新宿区戸山二-24-1-1
電話 〇三-五二八六-三七二一（呼出）
メールアドレス info@kinsebungakukai.com

パネリスト

国文学研究資料館名誉教授

高橋 則子

甲南女子大学（非）

北川 博子

横浜国立大学名誉教授

川添 裕

龍谷大学

寺田 詩麻

名城大学

岩井 眞實

デイスカッサント

大阪府立大学名誉教授

河合 眞澄

慶應義塾大学

合山 林太郎

司会

明治大学

日置 貴之

懇談会（一七・二〇〇～一八・三〇〇）

第二日 十一月六日(日)

会場開室 (九・三〇)

研究発表会 午前の部 (一〇・〇〇～一二・一〇)

1 明治期刊行「苧萱」勸化本の二系統——近世期刊行の「苧萱」諸作品との比較を中心に—— 龍谷大学(院) 岩間 智昭

2 『太閤記』の構成——小牧・長久手の戦いに関する検討を中心に—— 就実大学 竹内 洪介

3 東随舎『続思出草紙』の検証と考察 愛知県立大学 三宅 宏幸

昼 休 み (一二・一〇～一三・三〇)

研究発表会 午後の部 (一三・三〇～一六・二〇)

4 頼春水『負剣録』における中国游记の摂取の様相——近世後期の漢文紀行における表現の形成過程——

慶應義塾大学(院)

浅井 万優

5 津阪東陽の「唐音説」について——殆ど沙をこねるが如し—— 早稲田大学

池澤 一郎

6 小山田与清の蔵書形成——集書と考証と索引の関係—— 日本学術振興会特別研究員PD

梅田 径

7 光格天皇と女性歌人 京都産業大学

盛田 帝子

閉 会 (一六・二〇)

ハイブリッド方式での大会実施にあたって

二〇二〇年初め以来続く新型コロナウイルス感染症の流行に伴い、日本近世文学会の研究大会も、一度の中止を余儀なくされ、過去四回にわたってオンライン形式で実施してまいりました。これにより、海外に居住される研究者にご登壇いただいたり、非会員の方を含め、従来は来場が困難であった方にご参加いただきやすくなるなど、利点があったのも事実です。しかしながら、研究成果の発表や議論だけでなく、会員相互の交流を図ることや、大会が開催される土地の文化や歴史に触れるといった、従来の本学会の研究大会の意義を考えれば、対面での研究大会の開催が今後必要であることは間違いありません。

今大会では、オンライン形式と対面形式の利点をともに活かすべく、両者を併用したハイブリッド方式によって開催いたします。依然として感染症の流行が続く中であり、飲食物の本格的な提供をおこなうことはできませんが（ソフトドリンクのみご用意します）、初日のシンポジウム終了後には、懇談会という形で交流の機会を設ける予定です。

ハイブリッド方式での開催は本学会としては初めてのことであり、何かと至らぬ点もあるかと存じますが、多くの方のご参加をお待ちしております。

シンポジウム要旨

越境する・交流する

—近世演劇を起点として—

明治大学 日置 貴之(司会)

日本の近世文学の多様性を反映して、日本近世文学会においては、中世末期から明治初期に至る幅広い時代とジャンルにわたる研究発表がなされてきた。また、その研究の方法も、文献学・書誌学的なものにとどまらず、歴史学や美術史学をはじめとする隣接諸学の手法を援用したものや、近年では文理融合的なものなど、多岐にわたっている。こうした多様性が日本近世文学研究の魅力であることは間違いないが、一方で対象と研究方法の多様性、そして各ジャンルにおける研究の発展によって、研究の蛸壺化が生じていることも否定はできない。

このシンポジウムでは、近世演劇を出発点として、演劇研究の多様な方法の実例を見ていくとともに、さまざまな隣接ジャンルとの関係、都市と地方、大芝居と小芝居や寄席芸・見世物などとの関係などの問題について議論していきたい。近世演劇研究においては、台帳や浄瑠璃本といった文献資料のみならず、絵画や戯作等の文芸への幅広い目配りが常に求められる。また、近年では江戸や京・大坂といった都市だけでなく、さまざまな

地域における演劇や小芝居、寄席芸や見世物との関係など、近世演劇の多様な側面への研究が進んでおり、そうした多様性が、近代においてどのようなように継承されていったか、あるいは失われていったかという点の解明も進みつつある。

各報告によって示される、すでに消え去った身体やパフォーマンスのありさまを資料によって再構成するさまざまな方法は、演劇以外の研究にも示唆をもたらすものと考ええる。また、デイスカッサントおよび参加者とのやり取りを通して、演劇と諸ジャンルとの関係についての議論が深まり、越境・交流が実現することを期待する。

パネリスト

南北作歌舞伎の素材とその影響

—『ひとりたび独道中五十三駅』を中心に—

国文学研究資料館名誉教授 高橋 則子

文化文政期(一八〇四〜二九)の歌舞伎作者、鶴屋南北は永らく無学とされてきたが、実は様々な出版物から作劇していた。例えば『本草綱目』に影響された『画図百鬼夜行』、『今古奇観』に淵源を持つ読本、『史記』を典拠にした上方絵本等多様な出

出版物を素材とする。その中には南北劇によってさらに庶民対象出版物に流行したのものもある。今回は文政十年（一八二七）閏六月初演歌舞伎『独道中五十三駅』の猫石の精が、寛政九年（一七九七）刊『東海道名所図会』を基に作劇され、その後の五十三次もの歌舞伎に踏襲されたことを指摘し、南北劇が当時の文芸に果たした役割を考察したい。

文化交流の場としての浮世絵・大坂編

甲南女子大学（非） 北川博子

大坂では浮世絵全体に占める役者絵の割合が高いが、文政中期頃までは職業絵師ではなく、歌舞伎の鬘屋で絵心のある素人たちが下絵を描いていた。そうしたこともあって、役者絵は文化交流の場となり、描かれた役者自身をはじめ、絵師や戯作者などが着賛した作品も多い。また、襲名や追善などの記念品として配り物にされた摺物は、大奉書に絵と賛を載せ、繊細な彫りや豪華な摺りで制作されるようになっていく。俳諧摺物の系譜もあってか、大坂の摺物の多くは浮世絵師以外が手掛けているのも特徴の一つである。実際に演劇関係の役者絵や摺物の画像を見ていくことで、分野の垣根が低く、人と人とが繋がりやすい大坂文化圏の様相を示していきたい。

つながる、ひろがる、見世物の交流世界

横浜国立大学名誉教授 川添裕

文政期はラクダ見世物や一田庄七郎の籠細工といった、上り総高で千両、二千両の規模と推定される巨大見世物興行があらわれた時代である。とくに大坂と江戸では、流行見世物を素材とした文芸作が多く著され、歌舞伎に当て込まれ、落し噺・落語に取り込まれ、本画や浮世絵の題材となった。今回は主にラクダ見世物にまつわる事例（文政六年、七年及びその前後）を取り上げ、漢詩、狂歌、歌舞伎、落語、戯作、画作など、巡業する見世物と絡んでひろがる文化現象をざっと見渡してみた。そこにはしばしば話題を共有してつながる交流世界があり、また往時の海外認識が垣間見える点でも、動物と人間との関係史という点でも、興味深いものなのである。

明治期の近松受容

——新派における上演を中心に

龍谷大学 寺田詩麻

明治期、「近松門左衛門の作品をどう読み、上演するか」という問いについては、多くの試みがあった。学術的なものとしてたとえば坪内逍遙・饗庭篁村らの近松研究があり、実演の方

向からは、福地桜痴による時代物の活歴的な改作や、伊井蓉峰・河合武雄らの新派による世話物の「近松研究劇」上演がある。これらは一つの方向に収斂する性質をもたないが、今回の発表では、明治期の近松再評価について考えるきっかけをあらためて提供したい。また、日本大学文理学部国文学科がデジタルアーカイブで公開している、喜多村緑郎文庫所蔵の近松物の台本についても言及を試みる予定である。

地方から中央を、近代から近世を照射する

名城大学 岩 井 眞 實

極めて大雑把に言うならば、近代演劇史研究は東京の大劇場における演劇を主たる対象としてきた。そしてそこから遡った地点に近世演劇の全体像が結ばれることになる。そこで本発表では、「反（非）江戸／東京・大劇場演劇史」の視点から、地方／中央、近代／近世の演劇の様相を考えてみたい。まず、近代博多の歌舞伎興行を中心に、番付・衣裳・小道具・大道具・演目の選定等、地方巡業の実態について紹介する。さらに地方の眼から見た「前近代の身体」とでも言うべきもの、特に上方役者のそれについて考察する。加えて、明治中期から地方にも夥しく発生する新演劇（新派）の扱った戯曲が貧弱なプロットしか持たなかった理由についても言及したい。

研究発表要旨

明治期刊行「苜蓿」勸化本の二系統

— 近世期刊行「苜蓿」諸作品との比較を中心に —

蕨谷大学（院） 岩 間 智 昭

苜蓿説話は近世に入り、分野の垣根を超えて多くの作品の題材となった。勸化本も例外ではなく、寛延二年には「苜蓿道心行状記」が刊行され、浄瑠璃『苜蓿桑門筑紫轢』（享保二〇年初演）とともに、後続する「苜蓿」諸作品の基盤となった。しかし、その後「苜蓿」勸化本の刊行は永く停滞した。

時代は下り、明治二〇年代に入ると、多くの「苜蓿」勸化本が刊行された。本発表では、①『連夜説教石童丸』（明治二八年刊）、②『説教苜蓿発心因縁談』（明治二二年刊）、③『筑前苜蓿宗教小説芳名録』（明治二七年刊）を主な研究対象とする。近世期刊行の「苜蓿」諸作品との比較を通して、『苜蓿道心行状記』以後に刊行された「苜蓿」説教の内容を精査する。

①は、明治二七年より刊行された「連夜説教」シリーズ（全二四冊）の内の一冊である。その本文を確認すると、大まかな内容に留まらず、細かな本文表現に至るまで『苜蓿道心行状記』を利用していることが明らかとなる。

②③は、先行研究において「重氏家臣型」と呼ばれる一群で

ある。前半は、先行の「苜萱」諸作品には見られない独自の内容を有している。その一方で、後半については、説経『かるかや』（寛永八年刊）に酷似した内容であることが判明した。さらに、同内容を伝える写本『苜萱道心発心章』（明治一〇年写、沙加戸弘氏翻刻）の存在に徴すれば、②③の内容が、当代「苜萱」説教の一つの典型であったことが考えられる。

『太閤記』の構成

—小牧・長久手の戦いに関する検討を中心に—

就実大学 竹内 洪介

小瀬甫庵『太閤記』（全二十二巻、寛永三年（一六二六）刊）は、巻一〜巻十六を秀吉の正伝とし、巻十七を関白秀次の伝、巻十八・巻十九を武將列伝、巻二十・巻二十一を甫庵の政治論・史論とする構成をとる。同書には夙に甫庵による歴史的虚構性が指摘される。

ところで、『太閤記』中における秀吉の正伝においては、まったく時系列に沿わない形で歴史叙述がなされている箇所がある。特に巻四（前田氏の戦記）、巻八（佐々成政の戦記）は前後巻と比較する限り、時系列に沿わない上、一見秀吉の生涯を綴る上で無関係な記録でもあるように思われる。本発表ではこの問題に注目し、巻七に示される記録も考慮にいたした上で、『太

閤記』巻九で詳細に取り上げられる「小牧・長久手の戦い」に焦点を当てる狙いがあつたということを、「小牧・長久手の戦い」の範囲を北陸や紀州、四国に広げて捉える近年の歴史学的成果も援用しながら明らかにする。加えて、甫庵が「小牧・長久手の戦い」を焦点化して歴史を叙述するために、あえて作中の時系列を調整することで『太閤記』を構成した可能性も指摘する。

そしてその上で、このような構成がとられた狙いを、他の巻に見られる繋がりや甫庵の思想的側面も含めて論じること、秀吉の生涯を描きつつも間接的に家康を称揚する『太閤記』の執筆意識の一端を明らかにしたい。

東随舎『続思出草紙』の検証と考察

愛知県立大学 三宅 宏幸

『古今雑談思出草紙』の著者東随舎（講釈師栗原幸十郎）が、旗本根岸鎮衛著『耳囊』の取材源の一人であつたことは、近藤瑞木氏「講釈師の読本」（『人文学報』三〇一、一九九九）がともに指摘する。また、近藤氏は科研費報告（二〇〇三）で『思出草紙』の異本『寰立撰誠感集』（神宮文庫蔵）を紹介されたが、総目録と内容とに齟齬があり、全容の把握が難しかった。

『国書総目録』未掲載の架蔵『続思出草紙』は全二十五冊の内、九冊が欠けた十六冊だが、総目録と序跋が残存する。序と跋の

年記は文化三年夏（五月）、序には『思出草紙』から漏れた「奇談雑説」を集めた旨が記され、『思出草紙』の続編と位置づけることができる。また、『誠感集』に目録題だけが残る項目が『統思出草紙』に存し、『統思出草紙』の欠巻部が『誠感集』に記載されることから、両書の全容が明らかとなる。

『統思出草紙』の内容に関しては、『耳囊』と共通する話があるほか、多くの項目が武家の著作と思しき『野翁物語』（写本、享和元年序）に依拠しつつ、その上で東随舎が自身の知識を加筆したり、『野翁物語』で「野翁云」とあるところを「予こたへて曰く」とするなど、改変する箇所も見て取れる。さらに、『野翁物語』からの撰取は、文化三年十二月の序を持つ東随舎の写本『古今奇談落葉集』にも及ぶ。

『統思出草紙』は、東随舎が武家界隈に流通する「奇談雑説」を蒐集し、それを利用して書き上げた雑談集と考えられる。

頼春水『負劍録』における中国游记の撰取の様相

―近世後期の漢文紀行における表現の形成過程―

慶應義塾大学（院） 浅井 万 優

『負劍録』は、頼春水が明和七年（一七七〇）に東日本を旅した際の見聞を記した漢文紀行であり、近世期には写本の形で流布している。本発表では、その改稿の過程を整理しつつ、『負

劍録』を著す際の、春水の意図や手法を明らかにし、併せて十八世紀後半の漢文における表現のあり方について分析する。

春水が曾根原魯卿に宛てた安永二年（一七七四）閏三月十六日付書簡において、春水は、当時なお支配的であった徂徠一派の文風について、具体性を欠くものと批判しており、実際に『負劍録』では、旅先の習俗や風景が詳細に記されている。

このような叙述に際して、春水がしばしば利用したのが、徂徠一派の関心の低かった、陸游『入蜀記』や范成大『吳船録』などの南宋の游记であった。今日、春風館に蔵される（頼山陽記念文化財団寄託）自筆草稿の記述からは、『負劍録』中の約六十箇所（語句）が、これらの作品由来のものであることが分かる。例を挙げるならば、鳥海山と潟湖で構成される象潟の特異な風景を描写する際、『入蜀記』中の鎮江の京口三山についての表現を、自身による改変なども施しつつ、利用している。

一方で、春水は、徂徠一派が好んだ明代古文辞派の作品からも約二十箇所の語句を撰取しており、たとえば、興津の自然の描出は、王世貞「歴黄榆馬嶺記」を参照したものである。春水は、徂徠一派への強い対抗意識を持っていたが、同時に、彼らの文学的な業績を継承・発展させてもいたのである。

津阪東陽の「唐音説」について

— 殆ど沙をこねるが如し —

早稲田大学 池澤 一郎

近世後期の伊勢津藩の儒者であった津阪東陽には「唐音説」(国会図書館所蔵『東陽先生詩文集』巻五)があつて、近世中期に、漢籍の唐音直読が普及し、白話小説が読書人の間で争つて読まれるようになったという幻想を見事に打ち砕く。

唐話による漢籍直読の提唱者荻生徂徠も、次善の策として、「顛倒」「和訓」で漢籍を解読することを認めていた(『譯文筌蹄』題言第五則)。徂徠と雁行して直読を提唱した雨森芳洲は、中国語を文言と白話とに峻別し、唐音直読は必須だが、文言の習得に際しては、唐音による会話力は妨げになるとした。唐音直読論者として名高い二人の碩学鴻儒は、実は和訓と音読との併用論者であつた。

津阪東陽の「唐音説」は、文言習熟に「唐音」学習は不要だとする論拠に雨森芳洲の『橘窓茶話』の一節を引用する。そこで芳洲は、五十年を超える唐音学習歴を回顧して、砂で団子を固めるような徒勞であつたと吐露する。結局、孔子が言うように、何もしないでいるよりは、たとい博奕でも何かしていたほうがましなので、その積もりで娯楽としてやるのならいい、自分にはそんな暇がないからやらないとする。本報告は東陽や芳

洲の主張を、一併用論者の立場から、現代の日本古典文学、中国学諸学会においても意義を有するものと位置付け、「国際化する学界を席捲する」「唐音」「直読」万能説に一矢を報いようとする試みである。

小山田与清の蔵書形成

— 集書と考証と索引の関係 —

日本学術振興会特別研究員 PD 梅田 径

小山田与清は弘化三年、自らの蔵書の大半を徳川斉昭へと寄贈する。これらの図書は彰考館において「潜龍閣文庫」の一部に吸収され「小山田本」として整理されている。これらは『彰考館図書目録 付焼失目録』(八潮書店、一九七七)に付された「小山田本」の注記によって判別できるものとして扱われてきた。しかし、発表者が国文学研究資料館のマイクロフィルムで調査した範囲に限っても、目録の注記以上の多数の図書が、小山田与清旧蔵書として認定できた。小山田与清旧蔵書には、蔵書印、特異な波線、傍線、圈点といった書き入れや多種の奥書や書き付け、蔵書票への注記など、他の彰考館文庫本にはない特徴が見られる。

本発表では、小山田与清旧蔵書の悉皆調査の途中経過を報告し、その集書や利用の実態を明らかにする。彰考館文庫中、小

山田本と認定しうる伝本の特徴を整理した上で、与清が図書を実際に利用する上で扱いやすいよう、索引や考証随筆との連携を視野にいられた情報を書き付けていた。

特に『群書搜索目録』及び『類字函』に対応する語句への傍線や圈点、鼈頭に着目したい。門弟の書写本にもそれらは移点されていた。また、奥書に記された感得・校合奥書などから、関心の推移を伺う事ができる。与清は単なる集書に留まらず、考証や疑問への応答を念頭において、必要な情報や語句に素早く行き当たるよう、整備された蔵書管理を行なっており、擁書楼ではこうした書籍を利用した考証活動が行われていた。

光格天皇と女性歌人

京都産業大学 盛田 帝子

本発表は、光格天皇の御代の女性歌人の営為を明らかにすることによって、従来、男性歌人を対象として描かれてきた堂上歌壇史の空白を埋め、宮廷における女性歌人の役割を歌壇史上に位置づけることをねらいとする。

宮廷における公的和歌行事への女性歌人の詠進は、『古今和歌集』成立以後、歌合などの行事を含めて定着したが、王権と表裏一体の關係にあった宮廷の女性歌人の文化的活動は、朝廷および公家の勢力が衰退してゆくにしたがって次第に減少し、

永正七年十月の禁裏和歌御会を最後に、女性歌人の公的和歌行事への詠進は途絶える。坂内泰子氏によれば、宮廷における女性歌人の詠進が復活するのは、中御門天皇の御代、享保十七年正月の禁裏和歌御会であり、二百年余り途絶えていた女性歌人の詠進の復活は、朝儀再興の一環としてであった（『国語と国文学』一九九八年三月）。

光格天皇の御代は、後桜町上皇が仙洞から御幸して和歌御当座始に出座し、中宮欣子内親王や女房が内裏の和歌御会始、七夕御会、重陽御会に詠進した。また、公の和歌御会とは別に、光格天皇は「女房月次」「女房内々当座」を催し、自らも「花月」「花月堂」という号によって歌を詠んだ。女性歌人の活躍が、宮廷歌会を運営する光格天皇の主導によって行われていたこと、光格天皇歌壇における後桜町上皇の存在の大きさにも言及する。

